市史通信

【目次】
●横浜・関東大震災の記憶
●横浜公園球場と野球
●1935年神奈川県名勝・史蹟投票
—横浜貿易新報社四五周年記念事業—
●資料紹介　朴烈の書
●所蔵資料紹介
●市史資料室たより

震災復興を喜ぶ市内有力者と芸妓たち　1929（昭和4）年4月24日
「〔昭和4年　天皇行幸写真帖〕」所収　横浜市史資料室所蔵

第6号
【発行日】2009年11月30日
【編集・発行】横浜市史資料室
〒220-0032
横浜市西区老松町1番地
横浜市中央図書館・地下1階
【電話】045-251-3260
【FAX】045-251-7321
【E-mail】
gy-sisi@city.yokohama.jp
【ホームページ】
http://www.city.yokohama.jp/me/gyousei/housei/sisi/

横浜・関東大震災の記憶

一、震災復興八〇周年

関東大震災の罹災地である横浜と東京は二〇〇九年から二〇一〇年にかけて震災復興八〇周年を迎える。横浜では一九二九（昭和四）年四月二三日と二四日に、東京では一九三〇（昭和五）年三月二四日と二六日にそれぞれ昭和天皇による行幸と記念式典が催され、かつて大災害に見舞われた人々は復興の喜びを分かち合った。

それから八〇年が経過した今日、都市・横浜はさらに発展する一方、政府は首都直下地震や東海地震への備えを唱えており、私達の日常生活は地震と隣り合わせの状況にある。地震の危険性を知るため、また、過去の経験から教訓を得るため、関東大震災の記憶を呼び起こし、当時の状況を振り返ることが今必要なのではないだろうか。

そうしたなか、本年四月、横浜市史資料室は神奈川区の前川写真館から一冊の写真帳の寄贈を受けた。その写真帳（資料名「〔関東大震災関係写真帖〕」）には、廃墟となった市街地や罹災者の生活、慰霊祭の風景などが収められており、震災後の横浜の状況を窺い知ることができる。この資料寄贈を契機に当資料室では、写真資料から関東大震災の記憶を呼び起こす展示会（「期間」二〇一〇年二月一日～三月二八日）と、災害記憶の継承について考えるシンポジウム（「期日」二〇一〇年二月一三日）を催すことになった。今回はその事前報告として、撮影者と推測される前川謙三の経歴を追うとともに、「〔関東大震災関係写真帖〕」の内容について紹介していきたい。

二、写真家・前川謙三

関東大震災の発生した一九二三（大正一二）年九月一日当時、前川写真館の創業者である前川謙三は弁天通三丁目において写真館を営んでいた。現在の写真館に伝わる話に依れば、震災後、行政から要請を受けた前川は撮影機材に助手を伴って罹災地を歩き回ったという。実際、写真帳の中には、山下町を背に助手を撮った写真が二点ある他、別の一点には、撮影機材を背負った人物も写っており、伝承の内容を裏付けている。

一八七三（明治六）年、福井県に生まれた前川は一六歳となる一八八九（明治二二）年に上京し、芝の丸木写真館、丸木利陽の下に入門する。丸木は後に東京写真業組合の組合長を務めるなど写真界の重鎮であった。そこで写真技術の基礎を学んだ前川は渡米してセントルイス写真学校で写真技術の研究に従事し、三年間のアメリカ生活を経て帰国した後は、杉浦六右衛門の六桜社（現・コニカミノルタ）に技術者として入社する。

一九〇九（明治四二）年、六桜社を退社した前川は横浜・山下町に写真館

【図1】復興途上の横浜、右端に再建後の前川写真館が確認できる。　左右田宗夫家資料

を開業し、その後、弁天通に店を移して事業を拡大させていった。写真館は震災時に焼失するが、同年一二月に営業を再開し、一九四五（昭和二〇）年五月二九日の横浜大空襲によって再び焼失するまで弁天通で営業を続けた（**【図一】**参照）。

敗戦から半年後の一九四六（昭和二一）年三月、前川はこの世を去る。一九一八（大正七）年に横浜通信社の刊行した日比野重郎編『横浜社会辞彙』はアメリカで写真技術を学んだ前川を「君は金港一流の写真師」と評しており、また、東京美術学校（現・東京芸術大学）や小西写真専門学校（現・東京工芸大学）も前川を講師（修整術担当）として招くなどその技術には定評があった。日本写真協会の編纂した『日本写真界の物故功労者顕彰録』は、前川を「米国に遊学人物撮影に蘊蓄深く一方の指導者であった」と評している。

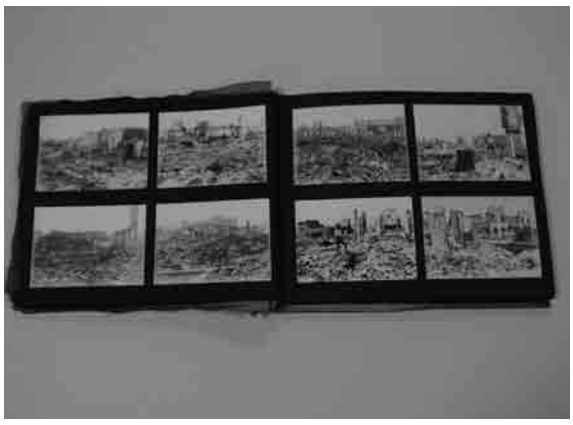
そうした実績から行政は前川に罹災地の写真撮影を依頼したのだろう。前川が撮影したと考えられる写真群は、『横浜復興会誌』（横浜復興会、一九二七年）や『横浜復興誌』全四編（横浜市役所、一九三二年）、横浜市震災記念館の展示などに使用された他、神奈川県立歴史博物館所蔵「横浜震災写真帳」や横浜市中央図書館所蔵「横浜震災被害写真帖」、横浜開港資料館所蔵「磯子小学校旧蔵震災写真帳」・「横浜市震災誌写真帳」（二冊）・「関東大震災記録写真帳」（二冊）にも見られ、公的機関を中心に幅広く活用されたと考えられる。このような性格から今回寄贈された写真帳は、横浜の関東大震災を記録した貴重かつ基礎的な歴史資料と言える。

三、「〔関東大震災関係写真帖〕」

写真帳には布張りの表紙（表紙は破損のため表は布のみ）に二四枚の黒色の台紙（縦二七cm×横三六cm、全四八頁）が綴られており、一頁につき三～四点の写真（縦一〇cm×横一四cm）が収められている（**【図二】**～**【図四】**参照）。写真の点数は全部で一五〇点、内容を大別すると、Ⅰ崩壊した建築物や焼け野原など市内の罹災状況を撮影した写真が一三二点、Ⅱ市電の復旧や救援物資の配給、小学校の授業風景など罹災者の生活を撮影した写真が一〇点、Ⅲ遭難者大追悼会や一周年追悼会など慰霊祭の様子を撮影した写真が八点となっている。建築物や街並みを撮影した写真が多い反面、人物の写った写真は少なく、被写体の動きはあまり感じられない。これは施設等の罹災状況に記録の重点を置いた結果であろう。

写真を歴史資料として保存する場合、いつ、どこで、誰が、何のために撮影したのか、といった基本情報が重要となってくる。しかし、関東大震災を記録した写真から読み取れる情報は限られており、撮影の時期や場所が判明している写真は極めて少ない。そのため震災関連写真の歴史的価値を見極め、基本情報を抽出するには、様々な歴史資料と写真を突き合わせながら一点一点検証する作業が必要である。「〔関東大震災関係写真帖〕」も多くの震災関連写真と同じように、残された情報は少なく、不透明な部分も多い。撮影者や撮影目的に関しては、管見の限り、他に記録がないので、前川写真館の伝承に依拠する以外に方法はない。少なくとも前川謙三の業績を考えれば、同写真館の伝承には説得力がある。それ以外の情報については、他の歴史資料と照合しながら可能な限り抽出を試みたい。

【図2】「〔関東大震災関係写真帖〕」の表紙

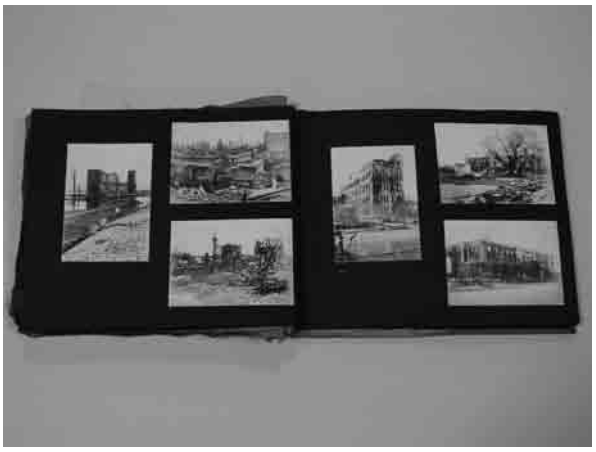

【図3】4点の写真が貼られたページ（写真は山下町方面）

四、撮影時期

写真の撮影時期はⅠからⅢで大きく異なる。まずⅠについて検討する。

Ⅰの主な撮影時期は港内に停泊する

軍艦や社会基盤の復旧状況から考えて、九月中旬頃と推察できる。例えば、崩壊した大桟橋を撮影した写真（【図五】参照）には、軽巡洋艦と共に停泊する伊勢型戦艦の艦影がはっきりと確認できる。防衛省防衛研究所図書館所蔵の『大正十二年　公文備考　変災災害七　巻百五十九』に依れば、戦艦「伊勢」は九月九日に横浜港に入港し、同月末まで停泊していた。九月一九日には同型艦の「日向」も横浜に入港しているが、同資料所収の地図や被写体の位置から考えて、写真の戦艦は「伊勢」であろう。九月一三日、第三戦隊司令官小林躋造は軽巡洋艦「球磨」から「伊勢」に移乗し、入港する船舶の管理と横浜に展開する海軍部隊の指揮を執った。また、地蔵坂から関内方面を撮影した写真（【図六】参照）には、亀之橋を復旧する工兵隊とそれを見守る人々の姿も確認できる。東京都公文書館所蔵「陸軍震災資料　第一」（松尾章一監修、田崎公司・坂本昇編集『関東大震災政府陸海軍関係史料Ⅱ巻　陸軍関係史料』、日本経済評論社、一九九七年、所収）に依れば、亀之橋の新設作業は九月一四日から二一日に小倉の工兵第一二大隊第三中隊によって行われている。



【図4】3点の写真が貼られたページ（写真は本町周辺）

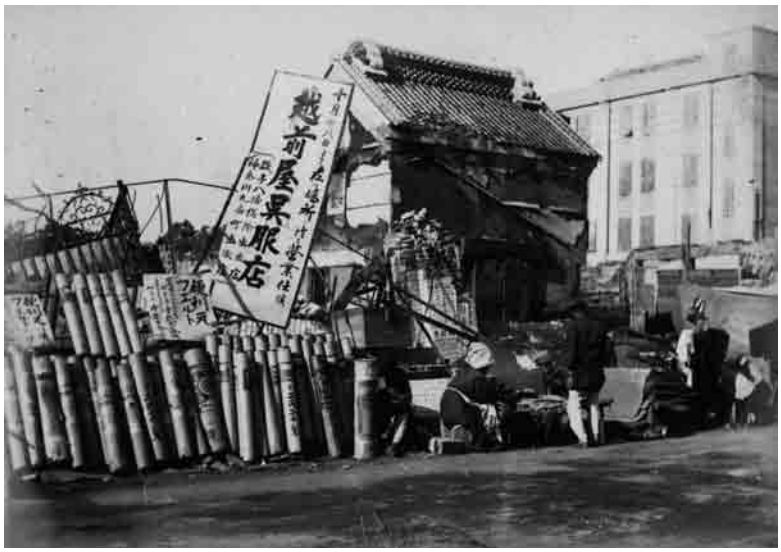
【図5】崩壊した大桟橋、写真奥に伊勢型戦艦の艦影が確認できる。

こうした記録からⅠの主な撮影時期は九月中、少なくとも一四日から二一日の期間内と考えられる。ただし、Ⅰには爆破・解体後の横浜市役所の写真なども含まれており、すべてが九月中旬頃というわけではない。拙稿「関東大震災と横浜市役所」（『市史通信』第五号）で述べたように、市役所は一〇月一五日に水戸の工兵第一四大隊によって爆破されているため、撮影時期はそれ以降であろう。また、後述するように、撮影場所は市街中心部からその周辺部の根岸、南太田、平沼、神奈川、子安と広範囲に及んでいる。その範囲を一日で歩き回ったとは考えにくいので、撮影は数日に亘ったと思われる。

次にⅡの写真群について検討する。写真の内容を細かく分けると、①授業風景を撮影した写真が三点、②寿小学校における救援物資の集積風景を撮影した写真が二点、③バラックを撮影した写真が一点、④市電のバラック車両を撮影した写真が一点、⑤伊勢佐木町を撮影した写真が三点となっている。これらは一〇月以降に撮影された写真と推察できる。まず①は市内小学校の授業再開が一〇月一五日であることからそれ以降であり、④もバラック車両の運行が一〇月一七日以降であるからそれ以後ということになる。②については、明確な撮影時期は不明だが、『横浜震災誌』第四冊に依れば、一〇月一日の臨時配給部設置に伴い寿小学校が配給場所となったので、撮影時期はその頃ではないだろうか。同様に③も明確な撮影時期は判らないが、収容者の生活状況などから震災後一カ月くらいたった時期だと考えられる。最後の⑤の一点（【図七】参照）には、露天の看板に「十月廿八日より左の場所に於て営業仕候　越前屋呉服店」の文字が見えるので、伊勢佐木町一帯の撮影時期は一〇月二八日前後であろう。

以上のように、Ⅰ、Ⅱの写真群の明確な撮影日を特定することはできないが、Ⅲの写真群は、「遭難者大追悼会」、「一周年追悼会」と撮影内容がはっきりしているので、撮影日の特定は可能である。即ち、前者は一一月一日、後者は一九二四（大正一三）年九月一日

【図6】坂道の先、写真中央に作業中の工兵が確認できる。



【図7】伊勢佐木町、越前屋呉服店跡の露天商

最も点数の多いIの写真群一三二点を撮影場所ごとに分類すると、①市街南東部（北方町・山手町・山下町）が三三点、②市内中心部（大桟橋、港湾施設、日本大通、本町、港町）が二八点、③市街北西部（伊勢佐木町、馬車道、野毛山、伊勢山、桜木町）が四一点、④市街周辺部（根岸町、平沼町、神奈川町、南太田町、大岡町）が三〇点であった。撮影場所は異国情緒溢れていた山手・山下町方面から本町周辺の官庁街、伊勢佐木町の繁華街や平沼・神奈川の工業地帯など広範囲に亘っており、各地域を代表する施設がカメラに収められている。そこから煉瓦造・石造の建築物の多い市街南東部は瓦礫が多く、木造建築物の密集する市街北西部は焼けたトタンや木材が多いという特徴が浮かび上がってくる。

撮影者の立ち位置やレンズの方向など細かい撮影場所の特定に関しては、市街南東部、北西部ともに大部分が残骸となっているため、間近な被写体から場所を特定することはできないが、主に外壁部分の焼け残った中央電話局新庁舎や開港記念横浜会館、横浜正金銀行や川崎銀行横浜支店、露亜銀行などが写っている場合は、その方角から瓦礫や焼け野原の位置を特定することが可能である。震災前、本町周辺に建てられた耐震・耐火の建築物群は、震動に耐えたものの、炎が内部に侵入し、大部分が焼け落ちている。完成直前だった中央電話局新庁舎などは結局解体され、その後、一九二九（昭和四）年に再建されている（現・横浜都市発展記念館）。しかし、焼け残った外壁部分は後世の我々に歴史的事実を明らかにするヒントを与えてくれている。

個々の写真とは別に、撮影者は寿小学校や関東学院（兵隊山）、中央職業紹介所（仮市役所）などを起点に市街地の全景を撮影しており、それらから焼き払われた街々の様子が窺える。野毛丘陵や山手丘陵から市街地を撮影した写真は他にも確認されているが、寿小学校から市街地を撮影した写真は貴重である。同小学校は一九一九（大正八）年四月二八日の埋地大火で焼失し、翌年一二月一五日、横浜市初の鉄筋コンクリート校舎として誕生した。そのことが幸いし、建物自体は焼け残った。そして、救援物資の供給地点になった他、市内を見渡す格好の撮影ポイントとなったのである。写真帳には野毛山方面（【図八】参照）、市役所方面、山下町方面（【図九】参照）を撮影した写真があり、主に商店や家屋の密集する市街北西部の罹災状況が窺える。

【図8】翁町4丁目（現2丁目）・寿小学校から野毛山方面を望む

【図9】翁町4丁目（現2丁目）・寿小学校から山下町方面を望む

以上の点を踏まえ、展示会では、「〔関東大震災関係写真帖〕」の性格を十分に活かしつつ、横浜の罹災状況とその特徴を時期や地域ごとに示していきたい。

【主要参考文献・資料】前川写真館「前川写真館の歴史」／横浜郷土研究会編『横浜に震災記念館があった』（同、一九九五年）／東京芸術大学百年史刊行委員会編『東京芸術学校百年史　東京美術学校編』第二巻（ぎょうせい、一九九二年）／金井圓・石井光太郎編『神奈川の写真誌　関東大震災』（有隣堂、一九七一年）／他

（吉田律人）

である。このような検討結果から「〔関東大震災関係写真帖〕」所収の主な写真は、九月中旬から一一月上旬頃に撮影されたと推察される。

五、撮影場所

「〔関東大震災関係写真帖〕」には撮影場所の説明がない上に、残骸となった建物も多いため、撮影場所は容易に特定できなかった。しかし、幸いにも横浜開港資料館所蔵「関東大震災記録写真帳」には撮影場所の説明があったので、そこから撮影場所を特定することができた。